



## 今回は、ダイバーシティSEKIシンポジウムの報告です。

### ◇ 高校生が市民の方々とともに、ダイバーシティの問題について考えました。

日時：平成30年7月1日(日) 13:00 ~ 16:00

場所：関市わかさプラザ 総合福祉会館3F 参加者：約60名(スタッフを含む)

テーマ：LGBTについて考える

主催：関高等学校 中部学院大学 関市市民協働課

内容：LGBT問題にとりくんだ生徒10名が、市民とともに「多様な性」について考えるイベント。

高校生による研究発表、当事者のコメント

講演 水野友有准教授(中部学院大学)「障がい者の性」

講演 竹ノ下祐二教授(中部学院大学)「霊長類の性」

### ◇ LGBTフレンドリー宣言とダイバーシティSEKIシンポジウム

関市「LGBTフレンドリー宣言」から約2年。関高校の有志によるLGBT研究もすでに3期目。

当事者支援団体、市役所、大学、企業等、様々な方々と交流を重ねる中で、いつしか、「多様な市民がおたがいを尊重し合い、みんなが暮らしやすく、認めあえるような、そんなまちをめざすワークショップを開こう！」という夢が広がりました。

名付けて、ダイバーシティSEKIシンポジウム。ダイバーシティとは、「多様性」の意味で、性別や国籍、年齢などに関わりなく、多様な人材を生かし最大限の能力を発揮できる社会を創り上よとの文脈で使われる言葉です。

性的マイノリティも、高齢者も、障がい者も、若者も、多様な市民がおたがいを尊重し合い、みんなが暮らしやすく、認め合い活躍することができるまちをめざす。

そんなダイバーシティについて、市民の方々とともに考える機会として、今回のイベントを開催したところ、当事者支援団体の皆さん、関心のある市民の皆さん、報道関係の方々にもお越しいただき、後半のワークショップは大いに盛り上がりました。

今回のイベントの特色のひとつは、ワークショップの前に、専門家のミニ講演をふたつ設けたことです。「障がい者の性」と「霊長類の性」という、一見してLGBT問題とはかけ離れたテーマについてのお話をうかがうことにより、「人間の性の多様性についてより深く認識できた」との声が、会場から多く寄せられました。



## ◇ 多様な性、多様な価値観をつつみこむ社会をめざして



関高 SGH 課題研究では、国連の SDG s を基準にし、テーマを設定を行っています。Sustainable Development Goals (持続可能な開発目標) の 17 の目標の中には、ジェンダー平等、人や国の差別撤廃、住み続けられるまちづくりも掲げられています。

## ◇ 参加者の感想

ダイバーシティ SEKI シンポジウム、大盛況にて終了。いやあ、面白かった。高校生の熱意と努力に拍手を贈ります。そして、彼らを信じて完全に裏方に徹した関市市民協働課のみなさんに脱帽です。地域で若者を育てるとはこういうことですね！  
(竹ノ下祐二先生)

本当に生徒さんたちのパワーと探究心に元気をもらえる、良いイベントでした。参加された市民の方もとても良い時間だったとおっしゃっていました。継続していくことは大変と思いますが、少しでも力になればと思います。これからもこの活動が続くことを応援しています！  
(当事者支援団体の方)

LGBT について、理解が深まったというよりは、今まで以上に人の多様性について考えていく必要があると感じました。また、日本人はどうしても「みんな」から外れているものを特別視する傾向が強いということも、このシンポジウムで改めて感じました。ワークショップの中で、男女トイレ、多目的トイレの話から、この LGBT の問題を通して、みんなが目に見えない違いを持っていることを理解することが大切という話が出ましたが、本当に大切なのは、多様化する多様性を受け入れることなんだと思いました。  
(一般市民の方)

今回のテーマを、マイノリティの性という視点から見ていたのが、生物の性という視点から見られるようになりました。

障がい者の性行為について、何か困難があっても不思議ではないのに、そのことを考えたことがない自分に気がつきました。私たちは道徳的に考えて、性行為自体をタブー視する傾向がありますが、なぜそれを卑猥だと思うのか、という理由を本質的に考えることはあまりありません。障がい者の性行為の介助がなぜ必要なのか、現実を知らなければ理解することは難しいのかもしれない。

性で満たされるものとは性欲だけではなく、健康的な性、精神的な性も含まれるのではないかと考えます。そのため、障がいがあり、精神的、肉体的に生活に困難を抱えている人が健康であるためには、性的にも満たされる必要があるのだと思います。「ノアール」に添い寝介助があるのはその



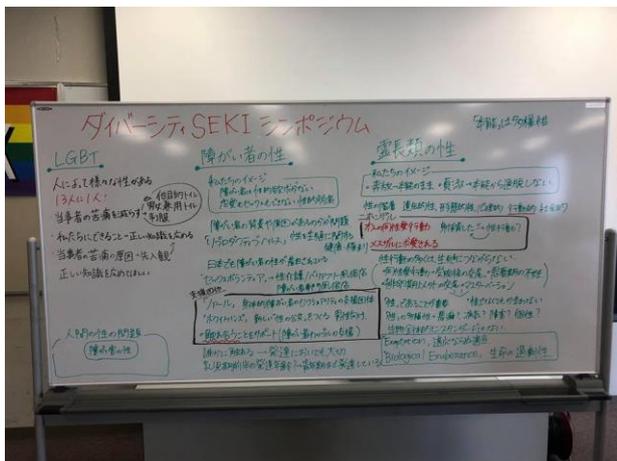
ためではないかと考えます。人間がタブー視するセックスは性的欲求を満たすためだけの行為だと捉えられがちですが、メイクラブ、と表記されると、愛のあるセックス、相手との愛を深めるための行為、という印象を抱かれるのではないのでしょうか。障がい者の性介助もそれに近いと思いました。そうであって欲しいと思いました。

私は、個人的に不倫に寛容にはなれませんが、知名度の高い人物の不倫を大々的に取り上げて叩くことに、意味があるとは思えません。性的に淫らだと感じたことを全否定することも、おかしいと感じます。健全だと思う性関係と、そうでない性関係がある。そう考えると人間の性への向き合い方は、生物としておもしろい発展を遂げたなあ、と思います。

サル(注)の同性間での性行為には、少しほっとしました。同性愛と、同性間での性行為が、受け入れられにくい世界に、サルだってするよ、人間だってしていいじゃない、同じ生き物なんですよ、と言いたい気持ちになりました。また、サル(注)の場合は、愛があるとかないとか関係ない気がするのですが、同性間での性行為が道徳的にどうか、人間は言わないのではないかと思います。しかし、これが人間の場合になると、捉え方が違ってくる。なんなんだ一体、という気持ちです。

性についての考え方が変わって、ある疑問が生まれました。性行為が何のためにあるのかわからなくなりました。今は結婚と子どもを生むことがセットになっている傾向があるので、子孫を残すための性行為、という考え方が一番教育的に安全に思える定義だと考えますが、もちろん単に性欲を満たすために、性行為をするということもあります。お金がある人はそのようなサービスを受けることができますが、ない人はそうすることができません。そんな時、一人ですますか、人を襲うかで、性への執着度合いが大きく変わってくると思います。また、性欲処理自体に他人のぬくもりを求めるか求めないかも、人それぞれだと思うので、性への接し方は全国一律にはできないのだなあ、ということを感じました。

個人の性癖のために、虐げられたいと思う人と、虐げたいと思う人同士の性行為は、双方の同意があれば犯罪にはなりません。一方的に迫り犯すとレイプになり犯罪になる。表面的にはどちらも暴力的な印象ですが、男女関係なく、当事者の感じ方で全く違う行為になる。そっとしておくべき特殊な性癖による性行為と、他者が介入し口を出すことが求められる性行為は、たとえその内容が非人道的であっても、個人が尊重されているかいけないかで、意味合いが変わってくるのでしょうか。



性犯罪でしばしば問題になるインドでは、子孫を残すためでも、快楽を得るためでもなく性行為が行われている気がします。初潮も迎えていないような幼い子をレイプして殺害する。これは、女性を辱め虐げ、自身の権威を示すためなのでしょう。性をそのようなことに利用しているのでしょうか。なぜこのような性行為をするのでしょうか。

人間の性は千差万別とはいえ、そこには何かしらの規定があり、そして、それは何なのか明らかにされることはないのかもしれないと思いました。

(生徒代表)